

芸術文化が都市の起爆剤に！ 世界のクリエイティブ・シティと日本の取組み

〔日 時〕 平成29年7月28日（金）15:00～16:30

〔会 場〕 那覇市IT創造館

〔参加人数〕 35名（受講生32名、関係者3名）



〔講師〕 佐々木 雅幸（同志社大学特別客員教授）

1949年生まれ。京都大学大学院経済学研究科博士課程修了。京都大学博士（経済学）、金沢大学教授、立命館大学教授、大阪市立大学大学院教授などを経て、現職。文化庁地域文化創生本部主任研究官、創造都市ネットワーク日本の顧問も兼任。主著に『創造都市の経済学』『創造都市への挑戦』、編著に『創造農村』『創造都市への展望』『創造都市と社会包摂』など。

▶ 概要

「創造都市（クリエイティブ・シティ）」をテーマに、欧米や日本で行われている芸術文化の創造性を活かした事業が、どのように都市の付加価値を高めてきたのか。各地の事例を紹介しながら、沖縄ならではの創造都市の可能性について語られた。

●創造都市の成り立ち

今日、20世紀に栄えた工業社会を中心とする成長が鈍ったことで、世界的に格差が広がり、資本主義が行き詰まりを見せている。リーマンショックを機に、金融からアートや創造性に価値が置かれ、市民一人ひとりが創造的に働き、暮らすことがイメージできる都市をつくろうと、「創造都市」の動きが広がっている。

創造都市の動きを特徴付けたのが、イギリスのトニー・ブレア元首相が提唱した「Creative Britain（クリエイティブ・ブリテン）」。13分野（広告・建築・美術品及び骨董品・デザイナーズファッション・映画及びビデオ産業・音楽産業・舞台芸術・出版・ソフトウェア・コンピューターゲーム及びビデオゲーム・テレビ及びラジオ放送・工芸・デザイン）の創造産業を推進・振興して、若者たちが活躍できる「場」を作ること成功した。さらに、クリエイティブ・ロンドン政策を通して、「都市ブランドの再確立」、「衰退地区の再生とホームレスの自立支援」、「学習態度・教育環境の改善と学力の向上」が実現し、文化とスポーツの祭典として成功事例に挙げられる「ロンドンオリ

ピック文化プログラム」の礎を築いた。

こうした動きの中で大切なことは、はじめからマーケットに任せるのではなく、先端的なアートを人類にとって普遍的な価値を産むものとして捉え、国や地域が効果的に支援することといえる。

●創造性が富む地域を作る

資本主義経済の発展に伴う大量生産や大量消費によって経済成長してきたアメリカでは、1980年代以降、自動車産業が衰退を見せはじめ、2013年には自動車の街と呼ばれた「デトロイト市」が財政破産する。

アメリカの社会経済学者のR・フロリダは、著書『The Rise of the Creative Class』（2002）で、「クリエイティブ・クラスが経済成長の新たな鍵になる」と提唱した。クリエイティブ・クラスとは、ブルーカラーやホワイトカラーといった階級分類とは違う新しい価値を創造できる人たちのこと。彼らを惹きつけるのは開放的で、寛容さや多様性がある環境である。例えば、サンフランシスコやシリコンバレーでは、LGBTを受け入れる寛容さを持っていたからこそ、さ

さまざまな文化や人種、社会グループが交流し多様性が生まれ、その環境に惹かれてクリエイティブ・クラスが集うようになった。

●社会課題を解決する街づくり

欧米での創造都市の広がり、ユネスコの創造都市ネットワークに広がり、現在世界72カ国180都市で構成されている。佐々木氏は、その中で特に注目する都市としてボローニャを挙げる。

ボローニャは、オペラ（イタリア語で、仕事や作品という意味があり、そこから転じて、ものづくりに携わる職人のような、創造的な働き方をいう）が街中に広がり、協働しながら課題解決を行うことで、街づくりに貢献してきた。例えば、精神的なダメージを負い、路上生活を余儀なくされたホームレスと一緒に舞台を作る友愛劇団の取り組みがある。そこでは、入居したホームレスと一緒に演劇に取り組み、舞台公演まで成功させることで、自律性を促し、生きる力を与えているのである。



オペラの精神で
スーパーカーが
つくられている

●現代芸術と伝統芸術との可能性

2013年には、創造都市の普及・発展を図るためのプラットフォームとして「創造都市ネットワーク日本」がスタートし、2017年には沖縄県の石垣島（石垣市）が参加するなど、加盟地域は年々増え、日本の



創造都市における「官公庁」と「マイノリティ」との
関わり方について質問が挙がった

創造都市ネットワークは100自治体を超えた。さらに、クリエイティブな動きは、日本社会の中心である東京よりむしろその周辺から起きている。「東京などは、アーティストが多い割に、保守的で世界のモノマネで終わってしまう傾向がある。それに比べて、過疎地や離島で活動するアーティストやクリエイターは、前衛的な活動を見せている」と佐々木氏は評価する。

伝統工芸・伝統芸能の街と呼ばれる金沢市は、ユネスコの「創造都市ネットワーク」で世界で初めて、クラフト分野で創造都市に認定（2009年）されて、市立美術工芸大学の学生たちを巻き込んだ、金沢版のクリエイティブ・ツーリズム「クラフト・ツーリズム」をはじめた。近年、日本は観光立国を掲げ、インバウンドの誘致を進めてきたが、その結果、想定以上の観光客が一部の地域に訪れて観光公害問題も生じてきた。その反省を踏まえ、観光の形も団体客中心の「マス・ツーリズム」から、新たな魅力を引き出す「クリエイティブ・ツーリズム」に変化しつつある。地域のアーティストや職人たちに教わりながらツーリストがものづくりを体験したり、そこで作品を購入したりすることで観光客も、地元に住むアーティストもウィン・ウィンの関係性を作っていければ、とこれからの創造都市のあり方を語られた。

●沖縄ならではの創造都市

会場からは、沖縄県の中で創造都市として期待している地域に関する質問があった。佐々木氏は、石垣島が島をクリエイティブの力で盛り上げようとしている「石垣島 Creative Flag」の取り組みを紹介した。「地元の伝統工芸品をパッケージごとクリエイティブな方にデザインしてもらうなど、これから地元の職人たちと関わりを深めて、地域に居住してもらうことで、新しい文化観光のツーリズムを構築できるのではないかと、沖縄ならではの可能性についても伝えられた。



講座風景